

Die industrialisierte Lebenswelt und Literatur in der Mitte des 19. Jahrhundert

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-10-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 磯崎, 康太郎, ISOZAKI, Kotaro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/2169

生活圏への科学の浸透と19世紀文学

磯崎 康太郎

序

今日、科学技術は、もはや中立的な価値しかもたない道具として理解できるものではなく、社会全体との複雑な相互作用のもと、ある目的や有用性という観点から自立して伸展する¹と言われている。こうした科学技術を生活圏における支配力として捉えている、社会学者ハンス・フライヤーに拠れば、「この〔素材を無機物として扱う技術精神に基づく〕技術主義は、ひとつの社会の根幹に据えられている。この社会の文明は技術装置の機能そのものに依存し、大部分の人間は高度に技術化された職に就いている。そこからさらに、技術主義は、組織、政治、教育の問題圏にも触手を伸ばす」²のである。この不可逆的な状況を踏まえた文化批評のあり方については、「産業文化が独自の法則性をもったひとつの体系であり、地球全体の生活形式になりつつあるという認識から、現代の文化批評は出発しなければならない」³と述べられている。フライヤーの見解に依拠すれば、ある時代や地域に特有の文化が存在していても、生活圏全体で「普遍的思考形式」⁴と化した科学技術は、その個性や特殊性を均質化してしまうほどの文化的影響力をもつ。この意味で、生活圏への科学技術の浸透という問題は、専門分野の垣根を越えて、共通で取り組むべき文化学の課題であるように思われる。

フライヤーは、20世紀後半の社会状況を考察の主たる対象にしているが、この科学技術の支配という問題は、「現代」に終始するものではない。フライヤーが歴史的考察のなかで、19世紀の産業革命を、「たとえば、新石器時代における定住化への移行といった規模の世界史全体の劇的変化」⁵と位置付けているように、科学技術の浸透の過程は産業革命に端を発する問題である。産業革命以来、技術は「無定形の力」となり、人間の意識的制御の範疇を超えて伸張し続けていく。たとえば、「進歩」(Fortschritt)という言葉は、18世紀には

¹ Vgl. Castoriadis, Cornelius: Technik. In: Ders.: Durchs Labyrinth. Seele, Vernunft, Gesellschaft. Übersetzt von Horst Brühmann. Frankfurt am Main (Europäische Verlagsanstalt) 1981, S. 195-211, hier S. 206 f.

² Freyer, Hans: Über das Dominantwerden technischer Kategorien in der Lebenswelt der industriellen Gesellschaft. In: Fischer, Peter (Hg.): Technik-philosophie. Von der Antike bis zur Gegenwart. Leipzig (Reclam) 1996, S. 237-254, hier S. 251.

³ Ebd., S. 253.

⁴ Ebd., S. 245.

⁵ Ebd., S. 253.

人間の内的陶冶を意味する言葉であったにもかかわらず、19世紀中葉のテクストでは、明らかに科学や産業関連の進歩という意味で用いられている。こうした語義の変遷という観点から報告された無数の例⁶が、産業革命以降の生活圏の変容を示唆しているように思われる。次々と新しい科学技術が開発されていった19世紀初頭から産業革命に至るまでの時期、あるいは自然主義文学にみられる、産業による人間の疎外化が問題視された19世紀後半から末期までの時期、これらの科学や産業の存在が際立つ二つの時期の間には、科学が生活圏に浸透していく過程があった。本論では、産業革命と自然主義の中間に位置する19世紀中葉、より厳密に言えば、1850年代以降のドイツ語圏の自然科学の流行という文化現象を、まずは概観したい。当時の「写実主義」文学は、自然科学的認識との相互作用のなかで、「絶えざる歴史の動きに基づいた同時代の日常的社会的現実の表現」を根本的特徴とする⁷とされている。こうした文学の側からの指摘を踏まえながら、本論では、流行現象の側から同時代の文学作品を考察することによって、両者の関連を明らかにすると共に、「写実主義」文学が科学や産業といかに対峙するのかを検討したい。

1. 19世紀中葉の自然科学の流行

科学が人間に幸福をもたらすという長年の夢は、産業革命の到来によって、にわかには現実味を帯びたものとなった。ナポレオン統治後のドイツの経済的勃興は、プロイセンの経済改革に促されて1833年に成立したドイツ関税同盟、それに続き1835年にニュルンベルクとフュルトとの間で、1837年にライプツィヒとドレスデンとの間で開通した鉄道による交通網の拡大、クルップやジーメンス等の新興企業によるドイツ産業の発展によって根拠付けられる。⁸大衆も、鉄道、近代工場の設立、大都市への人口の集中等を通して、身辺の風景が一変するのを目の当たりにした。⁹さらに、この時代に次々と設立された新しい科学協会¹⁰も、国家からの支援を得るために、科学の福音を伝道する必要があり、

⁶ ハンス・フライヤーは、産業化にまつわる語義の変遷として、「schalten」や「walten」のように、本来科学技術とは関係のなかった言葉に科学技術関連の意味が流入した例と、「Einstellung」や「auslösen」のように、科学技術に由来する言葉が生活圏の別の領域において転用された例とに大別して紹介している。Vgl. Ebd., S. 237-239.

⁷ Vgl. Preisendanz, Wolfgang: Voraussetzungen des poetischen Realismus in der deutschen Erzählkunst des 19. Jahrhunderts. In: Brinkmann, Richard (Hg.): Begriffsbestimmung des literarischen Realismus. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1987, S. 453-479, hier S. 461-463.

⁸ Vgl. Der kleine Ploetz. Hauptdaten der Weltgeschichte. Hrsg. vom Verlag Ploetz. 36., aktualisierte Aufl. Freiburg/Würzburg (Ploetz) 1996, S. 167 f.

⁹ 19世紀における視覚上の変化を論じる、ドルフ・シュテルンベルガーの以下の書は、科学そのものが、この時代にバトスをもたらし、抽象的に風景の輪郭を描いたと指摘している。Vgl. Sternberger, Dolf: Panorama oder Ansichten vom 19. Jahrhundert. Hamburg (Claassen & Goverts) 1946, S. 36.

¹⁰ 19世紀初頭までの科学アカデミーは、階級や社会的地位が高い科学者のみが所属できたり、超一流の科学者のみが入会を許される厳格な専門組織であったため、身分が

出版物や公開討論を通して大衆にアピールしていった。こうして徐々に高じた大衆の科学に対する関心にさらに拍車をかけたのが、ドイツ語圏の場合、1848年の三月革命であった。この革命による自由主義の挫折は、そのまま政治に対する失望感に変わり、いまや科学や産業が大衆の期待を一身に背負うものとなった。¹¹ また、ドイツ語圏に産業化がひとまず定着し、工業や商業の中心地が生まれたのが、この1850年代以降の時期である。これらの人口密集地帯において、様々な地域から集まった人々が経済的社会的相互活動を円滑に営むためには、標準語による識字能力が大前提となる。教育的経済的基盤がまだ欠けていた19世紀前半には、人口の大半が読書には不十分な識字能力しかもたず、大衆読書文化を繁栄させるには至らなかった。これに対して、1850年から約20年の時期は、大衆が実際的に「読者」になり、「本の購入者」になった時期である¹²とされている。このような状況を背景として、19世紀中葉の書籍市場には、自然科学関連の書物がブームを巻き起こした。この様子は、1854年に次のように書き留められている。

われわれの現在の文学において、自然科学が傑出した位置にあることは、誰も疑いえないだろう。自然科学がいまやこの位置を占めているのは、民衆の需要の目覚めや生[の内実]へと迫っていく研究精神のお陰であろうが、われわれの文学ですら、自然科学の地位にもはや逆らうことはできないのだ。¹³

1850年代と60年代初頭の時期、書籍市場全般は長引く不況に陥っていた¹⁴が、そのなかで自然科学書は、「傑出した位置」を占めていた様子が窺える。ヴォルフガング・ローエに拠れば、この時期に書籍市場を賑わした自然科学書は、その特徴に応じて、三つの類型に分けることができる。¹⁵ 第一の類型は、各専

低い者や中級以下の科学者たちには、門戸が開かれていなかった。しかし19世紀以降、科学とその応用効果がさらに重要性を増すにつれて、国ごとに科学振興協会やそれに匹敵するものが設立されていった。その先陣をきいたのはドイツであり、ドイツの科学者たちは1822年、ライプツィヒにはじめて集い、発足した「ドイツ自然研究者の会」(Deutsches Naturforschers Versammlung)は、年一回開催される科学者たちの会議として注目を集めていった。この点については、L・P・ウィリアムズ編(村上陽一郎監訳):世界科学史百科図鑑——3/19世紀(原書房)1993, 12-14頁参照。

¹¹ Vgl. Rohe, Wolfgang: Literatur und Naturwissenschaften. In: McInnes, Edward/ Plumpe, Gerhard (Hgg.): Bürgerlicher Realismus und Gründerzeit 1848-1890. München (dtv) 1996, S. 211-241, hier S. 221.

¹² Vgl. Hohendahl, Peter Uwe: Literarische Kultur im Zeitalter des Liberalismus 1830-1870. München (C. H. Beck) 1985, S. 397-402, hier bes. S. 400.

¹³ Ule, Otto: Preisausschreibung des Oesterreichischen Lloyd. In: Ders./ Müller, Karl (Hgg.): Die Natur. Zeitung zur Verbreitung naturwissenschaftlicher Kenntnis und Naturanschauung für Leser aller Stände. Jg. 3 (1854), Nr. 49, S. 400.

¹⁴ Vgl. Hohendahl, a. a. O., S. 397.

¹⁵ 自然科学書の類型化および事例の紹介に際しては、ヴォルフガング・ローエの前掲書における以下の記述に負うところが大きい。Vgl. Rohe, a. a. O., S. 213-222.

門分野の研究者が、専門的知識を大衆に分かり易く伝えようとしたものである。その特徴として、カール・フォークトの『動物学書簡』全2巻(1851)やカール・シュミットの『人類学書簡』(1852)のように、「書簡」という表題が付けられることで、一般人とのコミュニケーションを強く意識していること、さらには、ベルンハルト・コッタの『地質学図』(1852)やオットー・ウレの『物理学図』(1854)のように、数多くの図版を備えることによって、読者の視覚効果に訴えかけようとしている点が挙げられる。

第二の類型は、科学と社会の境界線を越えて、科学の社会的効果を論じたものであり、科学者のみならず、哲学者によっても執筆された。50年代の唯物論も、この類型に含めて考えることができる。たとえば、唯物論の唱道者である生理学者カール・フォークトの主張は、次のようなものである。「胆汁が肝臓の産物であり、尿が腎臓の産物であるように、思考は脳の産物である。その当然の結果として、胆汁が肝臓と共に滅びるように、精神は脳と共に滅びる。人間と呼ばれる動物機械は、鉄の強制力に基づいて働く。自由意志などは存在せず、したがって、責任感や責任能力などもない。」¹⁶ こうした唯物論は、それ以前の唯物論と比して、当然のことながら、19世紀半ばの科学の発達段階に応じ、その認識状況を活用している。さらに、これは新しい科学協会の場において論争にまで発展しており、¹⁷ フォークトの先鋭化された主張が、人間の自由意志の否定にまで到達している点が特徴的であると言えよう。

最後に第三の類型は、自然科学の全知識を一括した全体像を創造することを志向して執筆されたものである。これらは、分野ごとの個別研究を特徴とするこの時代の科学と比べて、その時勢に乗じない遠大な試みであったと言えよう。この類型を代表する、アレクサンダー・フォン・フンボルトの『コスモス——自然科学的世界記述の概略』全5巻(1845・1862)は、自然科学ブームの火付け役ともなったベストセラーであった。

雑誌等の定期刊行物も、自然科学を大衆に媒介した。そのなかで発行部数の多さと刊行期間の長さで群を抜いていたのが、『自然——全階級の読者のために自然科学の知と自然観を流布するための新聞』である。1852年から50年間に亘って刊行された、この週刊誌には、先述の三つの類型の全特徴が網羅されているといっても過言ではない。科学の専門知識のみならず、自然科学の意義を自然哲学的美学的に位置付ける試みとして、この雑誌の編者カール・ミュラーは、1854年計7回に亘り、「自然と芸術に関する書簡」と題された記事を

¹⁶ Zit. nach Kummer, Friedrich: Deutsche Literaturgeschichte des neunzehnten Jahrhunderts. Dargestellt nach Generationen. Dresden (Verlag von Carl Reißner) 1909, S. 301.

¹⁷ 二人の生理学者カール・フォークトとルドルフ・ヴァーグナーは、前者が唯物論の支持者、後者が反対者である。人間の精神と系統の問題をめぐる、かれらが激論を戦わせたため、1854年の「ゲッティンゲン自然研究者の会」(Göttinger Naturforscherversammlung)が意見交換の場となった。こうした経過から、1855年が唯物主義論争の頂点を極めた年であると言われている。Vgl. Ebd.

連載している。その第3部「自然科学と文学」では、「自然科学なくして芸術はなし！自然科学なくして偉大な詩人はなし！」¹⁸ という単刀直入な標語が掲げられ、芸術に対する科学の役割が、次のように述べられている。

秘密めいた夜に、旅人を山の峡谷で道に迷わせ、山の霊を出現させ、岩を開き、開いた門を通して旅人をなかへ導き、光を放つ広間において世界のすべての領域とその素晴らしい産物を目の当たりにさせる感覚的なメルヒェンと同様に、芸術と結ばれた科学は、光を授受しながら、選り抜きのものをつくりだす。科学は芸術家に自らの世界を開示することによって、芸術家の自立をうながし、大量の被造物のなかに〔認められる〕永遠のもの、とどまるもの、本質的なもの、あるがままのものを示す。科学がなければ、芸術家は絶えず、何千回も使われてきた古い形象やものの考え方へと立ち戻ることを余儀なくされるだろう。¹⁹

ミュラーは、隆盛を極めたロマン派を中心とする文学を「メルヒェン」のジャンルに収斂して考えており、その「メルヒェン」の持つ「魔力」に、科学の力を擬している。そして過去の模倣や亜流を脱却し、「メルヒェン」に対抗できる新しい時代的芸術を創るためには、時代の核心である科学をいかに活用させるか、が文学の課題であると述べている。科学を礼讃するミュラーは、科学主義の否定的側面を視野に入れていなかった。しかし、だからといって、科学万能主義とも言うべき当時の極端な唯物論の主張に迎合するものでもなかった。

「しかし、精神の自由はどうなのですか」とあなたは焦燥感に駆られて尋ねることだろう。「すべてからまさに輝き出ているのは、人間が万有の、永遠なる理性の精神的鏡像であるということです」とあなたが言うのが、私には聞こえる。それはまったく正しい。人間はそういう存在である。もしくは、はるかにそれ以上のものである。人間は受け入れるだけでなく、より純粋に〔万有の法則を〕映し出すものでもある。科学と芸術は、高貴な道義の形成者であり、人間の自由精神の証なのだ。²⁰

芸術領域において規範としての影響力を保っていた観念論の伝統、さらには、精神の不死への信仰が世俗化のなかで個人主義と融合した、そもそも18世紀感傷主義に由来する思想が、「三月前期」(1815・1848)時代の思潮をなしていた。²¹ こうした伝統に対して異議を唱えることになった科学主義、とりわけ唯

¹⁸ Müller, Karl: Naturwissenschaft und Dichtkunst. In: Die Natur, a. a. O., Nr. 12, S. 89-92, hier S. 90.

¹⁹ Ebd.

²⁰ Müller, Karl: Natur und Menschenthum. In: Die Natur, a. a. O., Nr. 10, S. 73-76, hier S. 75.

²¹ Vgl. Sengle, Friedrich: Biedermeierzeit. Deutsche Literatur im Span-

物論は、神学的立場からの不興を買う。このような1850年代にみられる対立構造のなかで、ミュラーは明確に態度を決定することなく、むしろ両者を折衷するような立場をとっている。科学のもたらす新しい認識への期待感に満たされ、しかしそう考えることは、人間の主体的なあり方と何ら齟齬をきたすものではないと考えている。科学が生活圏へと入り込んできた、だが、その弊害はまだ広く認識されていない、という情勢に応じて、ミュラーの楽観的立場は、時代の風潮を象徴的に表していると言えるだろう。

ミュラーの記述には、科学に関連して「光を授受しながら、選り抜きのもの」や「大量の被造物」が作り出されると書かれている。この言葉に示唆されているように、当時の科学と産業化による社会的変化は、大衆にとって視覚上の変化でもあった。先述の通り、産業化は、大衆にとって身近な風景が急変していく過程であったし、1850年代流行の自然科学関連の書物は、その多くが図版を備えていることを特徴とする。このことを端的に示しているのは、『自然』誌にみられる夥しい数の挿画である。しかし、この可視的な変化の背後では、「無定形な力」と化した科学技術が、大衆の心を虜にして、次々とかれらの新たな欲望を掻き立てていったのである。泡沫的な書物が市場に溢れていく様子は、書店等において大衆が目目の当たりにできる現象でありながらも、その現象の内的法則として、科学が生活圏へと不可視的に浸透したことを示しているように思われる。

2. 1850年代の文学

『自然』誌の成功を視野に入れながら、同誌の科学追従の文学傾向を揶揄しているルドルフ・フォン・ゴットシャルの『詩学』(1858)²²は、そもそも「ポエジーが完全に下位の役割に甘んじなければならないような唯物主義の時代」において、「私たちが確信するところでは、ポエジーの生命力は強く、一時的に不遇であっても、ポエジーを窒息死させることはできないであろう²³」という信念のもとに執筆されている。しかしその一方で、「文学の技術」という副題にすでに含意されているように、「詩作を整える法則」²⁴にも関心がある。そのため、「その[文学に描かれる]花が、現実には蕾をつけたことのない季節に咲いているのは、見たくない」と述べたうえで、「植物の形状と植物地理学を考慮に入れた忠実さ」²⁵

を自然描写に要請している。さらに、文学の動機は、「自然法則の論理に反してはならない」一方で、「人間の心にも反してはならない」²⁶と述べており、科学と人間の主体性という問題に対しては、やはり折衷的であると言えよう。1850年代に出版が始まり、半世紀近くも刊行され続けたという点で、『詩学』もまた当時普及した本である。しかし、『自然』誌と比して、『詩学』は文字通り考察対象を文学に向けているにもかかわらず、期せずして、ドイツ語圏の文化に科学への楽観主義を流布することに寄与したのではないか。

産業革命がその産物を可視的・具象的に巷へと氾濫させていく過程は一方で、科学が人々の意識下にまで入り込んでいく過程でもある。この点では、文学の名声を博し、今日なお名を残す作家も例外ではない。このことは、1850年代半ばに発表された長編小説、ゴットフリート・ケラーの『緑のハインリヒ』初稿とアーダルベルト・シュティフターの『晩夏』によって確認することができる。両作家にとって、三月革命の挫折は故郷へと再び目を転じる契機となった。それぞれの故郷であるチューリヒとリンツが物語の舞台とも考えられ、どちらも自叙伝的要素が色濃くみられる作品である。テキストに盛り込まれた作者自身の経験は、かれらの成長期の体験にのみとどまらず、50年代の見聞に至るまで、描かれているのではないだろうか。

『緑のハインリヒ』初稿は、1854年から55年というドイツで唯物主義論争が頂点を極めるなかで出版された長編小説である。ケラー自身、生理学の視点から唯物論を唱えたヤーコブ・モーレンシュットと親密な関係にあったばかりか、ハイデルベルク大学時代には、ヤーコブ・ヘンレ教授の生理学に依拠した人類学の講義に参加していた。その講義の影響は、『緑のハインリヒ』のなかにもみられる。ハインリヒは、「学問の幸福が真の幸福にも属する理由は、それが単純なものであり、誰にも遠慮のいらぬものであるからだ。その時期が遅かろうと早かろうと、時機を逸したことを悔やませることもなく、学問がなし得ることは、常に完全であるからだ。それは未来を指し示して、過去を指し示さない。法則の不変の存続と生命に思いをいたしている間は、自分自身のはかなさを忘れていられるのである」²⁷と学問の喜びを語り、彼の参加した講義の様子を次のように述べている。

見ることも、聞くことも、感じることもできる華麗な深紅の血液は、絶えず移動し、循環している。それに対して、静止を保ち、色がないのが神経系である、しかし、これは遍在で万能の動きの主である。血液がきちんとした分かり易い動きをしながら、動き回らなければならない一方で、神経系は秘密めいた稲妻の速さで支配しているのだ。ハインリヒにとって、血液とは有機体に全般的な流れであった。それは球体で満たされ、その球体各々がすでにひとつの世界を形づくり、その数は天の星のように数えきれない。[...]ここに[神経学から人間

nungsfeld zwischen Restauration und Revolution 1815-1848. Bd. 1. Stuttgart (J. B. Metzler) 1971, S. 74-77 u. 261 f.

²² 『自然』誌は数多くの詩篇、文芸評論、書評も掲載している。ルドルフ・フォン・ゴットシャルは、アルブレヒト・フォン・ハラーの詩を例に挙げ、「こうした(忘れられた自然詩人)を、《自然》の編集者たちが明るみに出したとき、かれらは自分たちの科学的関心をポエジーの関心と取り違えていた」と指摘している。Vgl. Gottschall, Rudolf von: Poetik. Die Dichtkunst und ihre Technik. Vom Standpunkte der Neuzeit. 6., vermehrte und verbesserte Aufl. Breslau (Verlag von Eduard Trewendt) 1893, Bd. 1, S. 100 f.

²³ Ebd., S. III.

²⁴ Ebd.

²⁵ Ebd., S. 189.

²⁶ Ebd.

²⁷ Keller, Gottfried: Der grüne Heinrich. Erste Fassung. In: Ders.: Sämtliche Werke in fünf Bänden. Hrsg. von Thomas Böning und Gerhard Kaiser. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1985, Bd. 2, S. 670.

の自由意志に関する教義に言及するところに)くと、講義のなかでさえ教授は逆上し、毎回短い、非常に激しく、自由意志と呼ばれる道徳の力の存在に対し、極端な唯物論の意味で反駁する結論を下すのだった。²⁸

ここでは、ハインリヒの受けた講義の内容として、血液と神経の関係が言及されている。血液が無数の球体で満たされているという点について、19世紀中葉の細胞学の発達が関与している。1837年に開発された半球型対物レンズのついた顕微鏡は、それ以前のどの顕微鏡よりも高い解像度をもっていた。これを利用して、1838年に植物、39年に動物について、その生物体が細胞を構成単位としていることが明らかになった。これらは細胞説と呼ばれ、以後、細胞の構造と機能が本格的に研究されるようになった。この細胞観察の過程で、人間の血球も観察されるようになり、顕微鏡を通して観察された赤血球の様子が、写真に残されている例もみられる。²⁹ さらに、神経の伝達する速さについては、当時の神経生理学発展の端緒として、ヘルマン・フォン・ヘルムホルツによって神経の伝達速度が測定されたという背景が関与しているのだろう。また、この講義を行った教授が「自由意志を否定」していた様子が描かれている。物語のうえで、こうした唯物論の主張を突きつけられ、自由意志の存在を信じていた主人公ハインリヒは葛藤に陥り、結局のところ、自由意志を擁護し、教師の論拠を否定する結論に至る。この段階で、教養小説の観点からこの課題は克服されたことになるであろう。しかし、この小説のなかで自然科学は、教養を積んでいく主体に対峙する課題や対象という扱いにとどまらず、ハインリヒという対象を描く際の描き方としても使われている。³⁰ 彼は「意志の自由」を信じているはずであるが、彼の姿はその時々において、「意志のない乾いた植物」³¹ や「宿命的な激しい飢えのために別な木の葉を欲する芋虫」³² と表現されている。さらに、長い絶食の期間を経たハインリヒについて、「思考力を取り戻す」ために、「栄養たっぷりの肉のスープを飲み込むこと」³³ が必要であったことが強調されている。ケラーと交流のあった先述のモーレショットは、1850年に「憐なくして思考なし」という唯物主義の重要な標語を提示しており、栄養と骨を作る燐があってこそ、思考が可能になるという、彼の主張が、ハインリヒという登場人物の造形に取り込まれている。³⁴

ドイツより産業革命の伝播が遅れたオーストリア、しかも一地方都市リンツというシュティフターのおかれていた地域性を考慮すれば、彼がドイツを中心とした自然科学の流行という時代現象の渦中にいたとは言いがたい。しかし、彼の場合、

²⁸ Ebd., S. 677 u. 680.

²⁹ ウィリアムズ前掲書、276・278頁および288頁参照。

³⁰ Vgl. Rohe, a. a. O., S. 237.

³¹ Keller, a. a. O., S. 688.

³² Ebd.

³³ Ebd., S. 730.

³⁴ Vgl. Rohe, a. a. O., S. 237.

ウィーン大学時代に数学、物理学、天文学を専攻している。さらに、日食にまつわる観察記録を始めとして、考察の対象が自然科学の対象と一致する文章も数多く残されている。そうした背景を念頭に置きながら、1857年に出版されたシュティフターの長編小説『晩夏』を考察したい。次の引用は、「薔薇の家」の庭花が、この作品のなかで最初に紹介されている箇所である。

薔薇以外にも、別な花が庭にはあった。桜草の苗床全体は、日陰にあった。それらは、おそらくの昔に花が枯れてしまっていたが、その濃緑の葉は、よく手入れされていることを示していた。あちこちに、百合が、ぼつんと離れて立っていた。よく成長した鉢植えのなでしこが、花を太陽から守るように設備された台のうえにおかれているのが、目についた。なでしこは、まだ花を咲かせていなかった。しかし、薔薇は十分に成長しており、素晴らしい花になることを予感させた。台のうえには、選り抜きのものだけがおかれているようだった。というのも、少し先まで行くと、この植物の一群が長く伸びている苗床に植えてあるのが見えたからだ。このほか、よく見かける庭花が、一部は花壇に、一部は離れた小さな場所にあり、また一部は生け垣として使われていた。あらせいとうも、特別に好まれていたようだ。それは品種も数も豊富で、たいへんに美しかった。そして、心地よい芳香をあたりに放っていた。この花は、鉢植えという形でも手入れされ、日当たりのよい場所におかれているのが見えた。球根植物に関しては、ヒヤシンスやチューリップ等があったかどうかは、判断できなかった。開花の時期がとうに過ぎていたからである。³⁵

ここで言及されている植物の開花の時期に注目したい。植物学上、「薔薇」(Rose)が開花するのは、初夏である6月ということになっている。「桜草」(Aurike)、「ヒヤシンス」(Hyazinthe)、「チューリップ」(Tulpe)は春に開花する植物なので、この6月という時期には、すでに花が散っている。「あらせいとう」(Levkoje)は、通常4月から5月に開花するが、夏まで花を残すため、「夏の庭花」の特徴を備えている。³⁶「百合」(Lilie)は、薔薇と同様に、夏に開花する植物である。なでしこは、夏から秋にかけて開花するため、この6月という時期には、まだ薔薇のようだろう。このように、薔薇とほぼ開花の時期を同じくする草花のみが開花している³⁷。一方で、それ以外の花は然るべき状態にある。四季で言えば、初夏、6月の一情景であることが、これらの植物の状況から判断することができる。先述の『自然』誌のなかで、ミュラーは科学の認識を活かしてい

³⁵ Stifter, Adalbert: Der Nachsommer. In: Ders.: Werke und Briefe. Historisch-kritische Gesamtausgabe. Hrsg. von Alfred Doppler und Wolfgang Frühwald. Bd. 4, 1. Stuttgart/ Berlin/ Köln/ Mainz (W. Kohlhammer) 1997, S. 61 f.

³⁶ Vgl. Brockhaus Enzyklopädie in zwanzig Bänden. Bd. 11. 17., völlig neubearbeitete Aufl. Wiesbaden (F. A. Brockhaus) 1970, Artikel „Levkoje“, S. 396 f.

³⁷ Vgl. Rohe, a. a. O., S. 225.

ない文学について、次のように述べている。「ある最近の詩人の春の詩をみなさい。そうすれば、彼が春、つまり5月を薔薇で祝っていることが、はっきりするだろう。これは自然に反するのである。なぜなら、これはまさしく嘘であるからだ。6月が薔薇の咲く月である。」³⁸『晩夏』出版の3年前に掲載されたミュラーのこの記述を、シュティフターが読んでいた、というより、むしろシュティフターは自らの自然観察によって、6月に咲く花とそうでない花を識別できたのであろう。とはいえ、彼の描写が、ミュラーの指摘に合致しているという点で、時宜に合うものであったことも間違いはない。

3. 科学への対抗規範の模索

自然科学的認識の文学に対する影響力は、危機意識のもとに眺められることはなかったのだろうか。フリードリヒ・ニーチェは、1881年発表の『曙光』において、「新しい目で見ると題されたアフォリズムを記載している。そこでは、リアリズムと科学との関連が、次のように述べられている。

芸術における美とは、ある時代なり、ある民族なり、自ら立法するある偉大な個人なりが、それぞれ何かの幸福者を想定するのに対応して、いつでも幸福なもの、追形成だとみなされるとすれば——私はそれを真実だと思うが——、そのとき、今日の芸術家のいわゆるリアリズムは、われわれの時代の幸福について、理解するに足る何を与えてくれるのか。われわれが今もつとも容易に理解し、享受する術を心得ているのは、疑い余地なくリアリズムの与えてくれる種類の美である。したがって、おそらく信じなければなるまい。今のわれわれに固有の幸福は、現実的なものにあり、できる限り鋭敏な感覚と忠実な現実把握にある。したがって、実在にあるのではなく、実在についての知識にあるのではないか。科学の影響がすでにそれほど深く、広いものになっているので、今世紀の芸術家は、それを望むことなくして、科学の至福の崇拜者になっている。³⁹

ニーチェは、中世哲学の「実在論」(Realismus)の伝統も踏まえながら、時代精神としてのリアリズムについて考察している。そもそも「実在論」は、普遍概念の実在を説く立場であった。これに対して、同時代の「写実主義」(Realismus)の関心は、存在論的な事物の「実在」(Realität)に向けられているのではなく、実際的個別的な知識に向けられているに過ぎない。この風潮を生んだのが科学である。リアリズムの時代には、科学は「望むことなくして」も作家にとって逃れ得ない課題になっていた。作家が意識しようとしまいと、作家

³⁸ Müller, Karl: Naturwissenschaft und Dichtkunst, a. a. O., S. 91.

³⁹ Nietzsche, Friedrich: Morgenröte. 5. Buch 433. In: Ders.: Kritische Studienausgabe in 15 Bänden. Hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari. 2., durchgesehene Aufl. Berlin/ New York (Walter de Gruyter): München (dtv) 1988, Bd. 3, S. 266.

自身とその生活世界にはすでに科学が入り込んでおり、作家は科学との関ぎ合いのなかで詩作することを余儀なくされていた。さらに、「至福」という言葉で、浅薄な科学万能主義や、楽観主義の風潮も揶揄されている。こうした指摘は、ニーチェが何より、一般的意識の低さにも関わらず、潜在意識へと不可視的に浸透していく科学の脅威を看破していたことを物語っている。この関連において、再び『晩夏』を取りあげたい。この小説が出版される直前の1857年3月に、シュティフターは、「この物語はわれわれの時代のなかで展開するのではなく、30年かそれ以上昔に遡って展開する」と述べたうえで、「読者は蒸気機関車や工場をその本のなかで探すという誘惑に駆られて」はいけない⁴⁰と述べている。この見解から、『晩夏』の時代設定は産業革命以前であり、その物語世界のなかで作者は、同時代の読者に「蒸気機関車」や「工場」を忘れさせ、産業革命以前の世界を思い出させるつもりであることが汲み取れる。しかし、『晩夏』のテキストには、次のようなリーザッハ男爵の見解がみられる。

まさしく私たちは、今ようやく始まったばかりのところにいるのです。もし稲妻の速度で全世界に情報を送ることができるとすれば、私たち自身が非常に速く、短時間のうちに地球のあらゆる場所に到達できるとすれば、そして、それと同じ速さで大きな荷物を輸送できるとすれば、どうなるのでしょうか。[...]現在、小さな地方都市とその周辺は、そのままの状態、自分たちの持っているものや知っていることだけで、隔絶した状態に在ることが出来ます。まもなく、そうしてもいられなくなり、全般的な交流のなかに引きずり込まれることとなります。⁴¹

この記述が社会の産業化に関連していることは、明白である。仮に過去の世界を構築するという明確な意図が働いていたにせよ、『晩夏』の時代においては、産業化をめぐる論議がつねに頭を擡げるのだと考えてよいだろう。さらに内容について言えば、まさにここで指摘されている、「速度」の時代が到来した現在からみて、シュティフターはすでに19世紀半ばという時代にあつて、人間の手を離れて進行していく産業化の過程が不可逆的なものであり、それは人間の主体性を脅かすほどの存在になることを予期していたと考えられる。

オットー・リーエ・ヴィルダームートは、シュティフターと交流があつた当時の女流児童文学作家である。シュティフターが高い評価を下しているヴィルダームートの短編集『シュヴァーベン形象と物語』の第2巻に、『自然研究者』という物語がある。1852年に発表され、今日忘れ去られたこの物語は、ローエに拠れば、自然や自然科学が、「逃避」や心の傷を癒やす「慰めのもと」へと偏向した例⁴²である。しかし実際、この物語と同時代的問題とは密接に関連しているように思

⁴⁰ Vgl. Stifter, Adalbert: Sämtliche Werke. Begründet und herausgegeben von August Sauer. 2. Aufl. Bd. 19. Reichenberg (Sudetendeutscher Verlag Franz Kraus) 1929, S. 14.

⁴¹ Stifter, Adalbert: Der Nachsommer, a. a. O., Bd. 4, 2, S. 227 f.

⁴² Vgl. Rohe, a. a. O., S. 234.

われる。物語末尾には、確かにローエの述べているように、「そこ〔かの素晴らしい国の谷間や山間〕で、ベルンハルトに対して、自然は豊かな慰めのもとをひらいた」⁴³と書かれている。また、ベルンハルトの婚約者エマの死が物語の転回点としてあまりに唐突に訪れ、それが掘り下げられることなく結末を迎えるといった点でも、文学的に成功を収めた作品であるとは言い難いだろう。しかし、こうした難点にもかかわらず、この物語の特異な点として、主人公たちの異常なまでの植物への愛着を挙げることができる。花束の贈呈を通して、ベルンハルトはエマに近づく契機を与えられ、その後も両者の交流には、絶えず花が関与し続ける。エマは死に際にあっても、「明るい空想だけはしており、ほとんどいつも庭のなかで美しい花々に交じっていた」⁴⁴のである。突然の神経熱がエマの命を奪うと、ベルンハルトは野山に入り、そこで自然研究に生き甲斐をもとめる。その結果、老齢に達した彼の姿は、「植物のように、直接空気と日光から自分の生命そのものを導く」⁴⁵と表現されている。ベルンハルトは植物そのものに成りきってしまう生き方を体現しているのだ。さらに、彼の人生行路に注目すれば、彼はエマとの結婚を目標としていた時分には、行商人として独り立ちしようと修行の日々を送っていた。商人としての経歴を通して市民社会のなかで名望を得ようとするあり方を、ベルンハルトも志していたわけだが、結婚の目標を失うと同時に、この行路から完全に足をあらい、自然へと入っていくのである。商人が「実用的で唯物的な職業」である一方で、自然は「ベルンハルトの瞑想的な世界であり、彼の実用的ではない仕事」⁴⁶の世界であると述べられている。こうした行路の転換、植物との同化という問題は、ベルンハルトの「逃避」を物語るというよりも、むしろ市民社会のなかで否応なく巻き込まれる物質的な競争との決別を物語っており、これは独自の生き方を模索するベルンハルトの主体的な選択である。作者の筆致も、ベルンハルトの生涯に哀れみの目を向けているわけではない。彼は「倦むことのない研究者」⁴⁷として自然に接しながら、市民社会の周縁で、「彼の所持する植物より幾分活発なだけで、ほぼ植物のような全く静かな生活」⁴⁸を送っていることが強調されている。

現代産業社会における、人間の主体性の危機を訴えている社会学者アルノルト・ゲーレンは、次のように述べている。産業は商品を生産するばかりではなく、それへの飽くなき消費欲求そのものを産出し、この欲求は需要に依存することなく独り歩きする。この消費欲求そのものの生産と自動化は、不可逆的なプロセスであって、「新たに広まりつつある不自由の根源」であるかもしれない。というのも、こうした安楽への権利は、組織化され、それに反する立場である、安楽を諦

⁴³ Wildermuth, Ottilie: Der Naturforscher. In: Dies.: Bilder und Geschichten aus Schwaben. Bd. 2. 5., durchgesehene Aufl. Stuttgart (Verlag von Adolph Krabbe) 1865, S. 316-336, hier S. 336.

⁴⁴ Ebd.

⁴⁵ Ebd., S. 318.

⁴⁶ Ebd., S. 320.

⁴⁷ Ebd., S. 318.

⁴⁸ Ebd.

観する権利を奪うからである。「禁欲主義」(Asketismus)と換言される、この安楽を諦観する権利とは、「何らかの意味において消費的幸福を諦念することを自ら欲し、これを押し通す態度」を意味する。この「禁欲主義」は、欲求の高まりに対する対抗規範として、古来から厳守されてきた。しかし、欲求そのものが自動産出されていく「現代における、禁欲的理想の驚くべき不在」という傾向は、顕著である。⁴⁹

生活圏における科学の浸透という現代産業社会の問題は、19世紀中葉の自然科学の流行という文化現象において、すでにその萌芽がみられること、さらに、科学技術が人間にとって不可視の脅威となることをニーチェやシュティフターが示唆していることを顧慮したとき、ゲーレンの指摘は、本論に疎遠なものではない。ヴィルダームートの『自然研究者』は、当時の唯物論や物興ししつつあった産業社会の言説を踏まえながら、そこから主体的な離脱を果たし、植物的生活を営む個人のあり方を描いている。産業化の危機を予感しながら、同時代に対して「節度」や「自由」を説き続けていたシュティフターの『晩夏』では、やはり同時代性に乏しく、独自の理想的活動規範をつくらうとする「薔薇の館」共同体が描かれている。⁵⁰こうした個人の段階にとどまらない、集団的な「諦観」の共有を、ゲーレンは「個の集積統合および節度」⁵¹と呼んでいる。この集団的拡大の姿勢は、「禁欲」を志した個人が押し潰されないためにも、それを産業化への対抗規範として機能させるためにも、肝要なものであろう。自然科学の流行や産業社会の勃興のなかで貫くべき「禁欲」的な態度は、1850年代の『自然研究者』や『晩夏』において、すでにひとつの潜在的な主題であった。そして、この時代に改めて節度や自然の潜在能力を問題視する姿勢は、決して時代錯誤のものではなく、伸張し続ける産業社会に対する対抗規範を提示しようとする試みであったと考えることができる。

結語

文学史上、写実主義と称される19世紀後半のドイツ語圏の文学は、「詩的」、「市民的」といった形容でその本質が明らかにされたと考えられてきた。オットー・ルートヴィヒらによって指摘された「詩的写実主義」(Poetischer Realismus)文学の中心課題は、現実即ち認識に依拠しながらも、「美化」(Verklärung)された状態をつくりだすことにある。このリアリズムの綱領では、客観性という基準に関与した科学そのものとの関係について黙秘されていることが多いため、両者の関係は、その重要性に比して、あまり注目されなかった。⁵²

⁴⁹ アルノルト・ゲーレン(平野具男訳):技術時代の魂の危機(法政大学出版局)1986, 108-112頁参照。

⁵⁰ 拙論:読者のためのユートピアの構築と相対化——シュティフターの『晩夏』とカント哲学——〔上智大学大学院STUFE刊行委員会『STUFE』第21号, 2001, 81-96頁〕, 84-89頁参照。

⁵¹ ゲーレン前掲書, 108頁。

⁵² Vgl. Rohe, a. a. O., S. 226-228.

また、つくりだされた「美化」の状態は、それがうまくいけばいくほど、むしろその情感や虚構性、過去への遡及が目立つものとなった。しかし実際、ケラーの『緑のハイムリヒ』における唯物論の記述にせよ、シュティフターの『晩夏』における庭花の記述にせよ、「写実主義」を始めとする 1850 年代の文学は、生活圏に浸透しつつあった科学への同化の脅威にさらされていた。まだ科学を楽観的に受容していた一般的傾向のなかで、「写実主義」の作家はそこから身を隔てる必要があると考えていた。しかし、科学の脅威は抑えがたくテキストに現出してしまふ。それほど科学技術の生活圏への浸透は、すでに 19 世紀中葉において著しいのである。そのため、自然科学がいかなる形でテキストに取り込まれているか、を検討する作業は、この時代の文学を考える際に必要不可欠であると言えよう。写実主義の作家の作品のみならず、今日では忘れ去られたこの時代の多くの文化的テキストは、こうした観点から見直すことによって、この時代の従来の文学的枠付けに一石を投じると共に、フライヤーの指摘している現代の文化批評の出発点を探ることができるように思われる。

産業社会における飽くなき消費欲求は、書籍市場の動向にも表れている。自然科学関連書が流行していた書籍市場は、1860 年代後半から、70 年代、80 年代へと拡大の一途を辿る。1868 年から 88 年の間に上梓された出版物の表題数は 62% 増加し、およそこの間に、市場全体で倍増以上の売上を記録している。⁵³ こうした消費社会の加速度的な進展のなかで、50 年代のシュティフターやヴィルダームートの言動や作品にみられる、倫理的自己規制の姿勢は、科学や産業の論理が横行し始めた同時代に対する苦肉の策であったとみなすことができる。ゲーレンの説く「禁欲主義」と同様に、かれらの試みが個を超えた社会集団のなかでいかなる精神的昂揚をもたらしたのか、という点については、さらに議論の余地がある⁵⁴ にせよ、かれらは産業社会に潜む危機を敏感に察知し、「反時代的」と称される態度で人間の主体性の保持に努めようとしていた。人間と生活環境との調和、ひいては人間の自然への一体化といった主題は、人間の主体性に対立する主題にみえる。しかし、これが産業社会の危機を予感していたからこそ投じられた主題であると捉えれば、人間が自らを制御できる範囲内で生き続けていくための試行錯誤であったように思われる。

⁵³ Vgl. Hohendahl, a. a. O., S. 397 f.

⁵⁴ アルノルト・ゲーレンが糸口を見出そうとした「禁欲」について、現代が地球的規模において産業技術時代に突入しているというのであれば、何人たりともこの大潮流を脱することはできないだろうし、大衆という個の放棄をその本質とする存在に対して、「禁欲」を要請することは不合理とも言える、という指摘もなされている。この点については、ゲーレン前掲書における訳者の「解説」(187-213 頁)、197-199 頁参照。

„Die moderne Kulturkritik muss von der Erkenntnis ausgehen, dass die Industriekultur ein System eigener Gesetzlichkeit ist und dass sie zur Lebensform der ganzen Erde zu werden im Begriffe ist.“ (Hans Freyer) Der Prozess, dass die technischen Kategorien in der europäischen Lebenswelt dominant werden, ist schon in der Mitte des 19. Jahrhunderts zu erkennen. Dieser Umstand soll in diesem Aufsatz unter dem kulturwissenschaftlichen Aspekt betrachtet werden. Aus damaligen Texten ist zu ersehen, dass naturwissenschaftliches Gedankengut auch Einfluss auf die Literatur der Zeit genommen hat und zwar implizit, wie auch explizit. So hat sich beispielsweise die realistische Literatur der fünfziger Jahre mit der industrialisierten Gesellschaft auseinandergesetzt.

Betrachtet man den Buchmarkt kurz nach 1848, dann fällt auf, dass naturwissenschaftliche Themen popularisiert wurden. Hier wurden nicht nur disziplinär begrenzte Wissenschaftsprosa, sondern auch Darstellungen über die sozialen Auswirkungen der Naturwissenschaften veröffentlicht. Zum letzteren Typus zählt eine materialistische Autorengruppe, die im Unterschied zum früheren Materialismus sogar den menschlichen „freien Willen“ verleugnet hat. Die allgemeine Tendenz ging aber dahin, dass – wie Karl Müller mit der von ihm herausgegebenen auflagenstarken und langlebigen Zeitschrift *Die Natur* – ein Kompromiss zwischen dem idealistischen und materialistischen Pol gesucht wurde.

Während viele sichtbare Veränderungen in der Gesellschaft vorgehen, läuft aber schon der unsichtbare Prozess der Industrialisierung in der Lebenswelt. Diesen Prozess zeigen *Der grüne Heinrich* (1854/55) von Gottfried Keller und *Der Nachsommer* (1857) von Adalbert Stifter. Wie an den einzelnen Beschreibungen und an der Gestaltung der Figur „Heinrich“ oder des Gartens des „Rosenhauses“ zu erkennen ist, wirkte sich eine naturwissenschaftlich geprägte Weltwahrnehmung aus, obwohl sich Keller wie auch Stifter erklärtermaßen gegen den Technizismus gewandt haben. Die beiden Schriftsteller können somit als Zeugen dafür herangezogen werden, wie in der Jahrhundertmitte naturwissenschaftliche Gedanken popularisiert wurden und wie sich unterschwellig ihre Wirkungsmächtigkeit entfaltete.

In der Erzählung *Der Naturforscher* (1852) von Ottilie Wildermuth geht es um das pflanzenhafte Sein des von der bürgerlichen Gesellschaft dezentralisierten Menschen.

Sowohl Wildermuth, als auch Stifter behandeln das Thema, wie man sich vom Zeitgeist entfernt, und welche Rolle der Mensch als Subjekt im natürlichen Lebenskreis einnehmen soll. Nicht anders verhält es sich mit der spontanen Entsagung bei der materiellen Konkurrenz, über deren Abwesenheit in der neueren Gesellschaft sich etwa Arnold Gehlen beklagt. Entgegen der allgemeinen optimistischen Tendenz zur industriellen Technologie sind einige realistische Autorinnen und Autoren, so wie Wildermuth und Stifter, unter dem Assimilationsdruck der Industriekultur schon in den fünfziger Jahren auf der Suche nach vom fortschreitenden Zeitalter abweichenden Leitideen, um zwischen den Lebewesen und ihrer Umgebung das Gleichgewicht zu halten.